プラン・インターナショナル

夏休み読書感想文
コンクール
2014－2016

作品集

公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン
〒154-8545　東京都世田谷区三軒茶屋2-11-22-11F
TEL:03-5481-0030　FAX:03-5481-6200
E-mail: education@plan-international.jp　www.plan-international.jp

世界の女の子に、生きていく力を。
Because I am a Girl　PLAN INTERNATIONAL

プラン・インターナショナル 夏休み読書感想文コンクール 2014－2016

作品集

世界の女の子に、生きていく力を。
Because I am a Girl　PLAN INTERNATIONAL

公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン

はじめに

プラン・インターナショナルは、子どもの権利が守られ、女の子が差別されない公正な社会を実現するために、世界70カ国以上で活動する国際ＮＧＯです。創立は1937年。長年にわたり、子どもや若者、地域の人々とともに地域開発を進めてきました。

今、世界を見ると、都市人口の急増や経済のグローバル化が引き起こす所得格差、気候変動に起因する深刻な自然災害の頻発、さらにテロ、難民、紛争などさまざまな問題が絡み合い、貧困の様相も複雑化しています。子どもや女性など弱い立場にいる人々は、以前にも増して「取り残される存在」として追いやられています。

プランは2007年から、「Because I am a Girlキャンペーン」をグローバルで展開し、「誰ひとり取り残さない」世界の実現に向けて取り組んでいます。「女の子だから」というそれだけの理由で、さまざまな困難に直面する女の子たちが世界にいるという現実を伝え、解決に向けた行動を喚起するとともに、こうした問題を解決するキーパーソンも女の子自身であるという「女の子のもつパワー」を訴えています。

このような背景の中、日本の中高生に、国際開発の優先課題の一つである女の子を取り巻く現状について知ってもらいたい、そして何ができるかを考え、それを綴ってもらいたい、という思いから「プラン・インターナショナル夏休み読書感想文コンクール」は始まりました。プランの支援者で直木賞作家の角田光代さんを審査員長に迎え、後援・協力団体、審査員の方々のご協力のもと、2014年から毎夏実施しています。これまで約4,000人の中高生が、途上国の女の子に関する課題図書を読み、感じたこと、考えたことを発信してくれました。その後、国際問題をさらに学びたいとＮＧＯの活動に参加したり、進路の参考にする中高生、また途上国問題の啓発活動やプロジェクト支援活動に取り組む中高生も増えているとの学校からのうれしい報告も届いています。

本コンクールが中高生にとって、世界の「今」を知り、より良い世界づくりのための一歩を踏み出すきっかけになればと願っています。多くの中高生の参加をお待ちしています。

目　次

入賞者・入賞校一覧 …… P2
2016年講評、入賞作品 …… P3
2015年講評、入賞作品 …… P9
2014年講評、入賞作品 …… P15
参加中学校・高校一覧 …… P21
学校賞の先生からの声、プランと学校との連携 …… P22

入賞者・入賞校一覧

2016 ｜ 応募者1,935人（中学1,347人、高校588人）・25都道府県

中学生の部

最優秀賞	武田 美由紀	関西創価中学校・高等学校 中学2年	「目の前の一人を幸せに」
優秀賞	野口 美沙	関西大倉中学校2年	「教育のために戦った少女」
特別賞	井上 夏希	関西大倉中学校2年	「女の子だけど女の子だから幸せになろう」

高校生の部

最優秀賞	水野 茉梨香	広島女学院中学高等学校 高校2年	「『女』であること」
優秀賞	藤澤 息吹	大妻中野中学校・高等学校 高校1年	「個性を差別する」
特別賞	深見 亮太	学習院高等科3年	「本のリレー」

学校賞

大妻中野中学校・高等学校、関西大倉中学校、関西創価中学校・高等学校
広島女学院中学高等学校、弥富市立弥富北中学校、宮城学院中学校・高等学校
豊島岡女子学園中学校・高等学校　（作品数順）

2015 ｜ 応募者1,700人（中学1,235人、高校465人）・22都府県

中学生の部

最優秀賞	中込 蓮	関西創価中学校・高等学校 中学校1年	「ぼくは男の子だから」
優秀賞	粂 瑞紀	関西創価中学校・高等学校 中学校1年	「世界で起きる問題を知って」
特別賞	安田 都々	弥富市立弥富北中学校3年	「教育を受ける」

高校生の部

最優秀賞	米子 佳蓮	富士見中学高等学校 高校2年	「より良い世界へ」
優秀賞	伊藤 可子	南山高等・中学校女子部 高校3年	「受け入れてはいけない伝統」
特別賞	仲間 愛梨	山口県立宇部高等学校3年	「私も女の子だから」

学校賞

大妻中野中学校･高等学校、関西創価中学校・高等学校、晃華学園中学校高等学校
宮城学院中学校・高等学校、東京学芸大学附属国際中等教育学校、京都学園中学高等学校
（作品数順）

2014 ｜ 応募者379人（中学96人、高校283）・26都道府県

中学生の部

最優秀賞	若松 ゆい	名古屋市立楠中学校3年	「一人の少女が国を変える」
優秀賞	熊木 ひと美	鎌倉市立大船中学校2年	「五人の少女のメッセージから考えたこと」
特別賞	福住 旺穫	目黒区立東山中学校3年	「全ての人に平等な教育を」

高校生の部

最優秀賞	伊藤 正子	滝中学校・滝高等学校 高校1年	「誰も私の行動を止められない」
優秀賞	渡邊 清子	お茶の水女子大学附属高等学校1年	「私の願い」
特別賞	上野 結羅	熊本県立宇土高等学校2年	「私はマララを読んで」

＊2015年より「学校賞」を設置。100作品以上（または全校生徒数の3割以上）の応募のあった学校を表彰

2016

［課題図書］

「わたしはマララ
教育のために立ち上がり、
タリバンに撃たれた少女」

マララ・ユスフザイ、
クリスティーナ・ラム著

金原瑞人、西田佳子訳

学研

「わたしは13歳、学校に
行けずに花嫁になる。
未来をうばわれる2億人の
女の子たち」

プラン・インターナショナル
職員著

合同出版

「Because I am a Girl
わたしは女の子だから」

アーヴィン・ウェルシュ、ティム・
ブッチャーほか著

角田光代訳

英治出版

「砂漠の女ディリー」

ワリス・ディリー著
協力＝キャスリーン・ミラー

武者圭子訳

草思社文庫

後　　援：国際連合広報センター、外務省、公益財団法人文字・活字文化推進機構
協　　力：公益社団法人ガールスカウト日本連盟、ＮＰＯ法人16歳の仕事塾、国際ガールズ・デー推進ネットワーク
表彰式共催：国際連合広報センター

2016

講評

審査員長　角田　光代

勉強があまり好きではない。なぜ勉強しなければならないのかわからない。学校にいきたくない日もある。そんなふうに思っていたと、この読書感想文に書く人は多いです。私も学校に通っているときは同じように思っていました。そして課題図書を読み、学校というものがあり、勉強するということが、当たり前のことではないと、みなさんが知っていきます。では、そう知ったことで、勉強が好きになるだろうか、学校がたのしくてしかたなくなるだろうか、というと、そんなことはないと私は思います。自分は恵まれている、幸せなのだと思い、何か不思議な罪悪感を覚えながらも、やっぱり勉強熱心にはなれないのではないでしょうか。けれどそれでいいのだと思います。学校というものがそもそも存在しない場所があり、学校があっても通えない人たちがいる、と知ることが重要なことだと思うのです。自分の見ている「ここ」だけが、世界ではないと知ることが。

中学生の部の武田美由紀さんの書いた「ルールを大切に思うのは、そのルールの意味することへの信頼があるから」だという文章に、私は目が覚める思いがしました。「平和」という言葉を持ち出すと、手の届かないような大きなことに思えますが、目の前の一人のことを考える、と考えれば、平和はもっと私に近いものになると、この感想文に教えてもらいました。野口美沙さんは、怒りの連鎖が何も生み出さないことに気づき、異文化や他宗教にたいする姿勢について考えています。多くの人が、女の子が差別されるのは遠くの国の問題だとするなかで、井上夏希さんはジェンダー平等の格付けで、日本が下位に位置していることを指摘しています。そんな社会のなかで、ひとりの人間としてどう生きていくか考え、すばらしい宣言をしています。

高校生の部の水野茉梨香さんは、自分自身の率直な言葉で「女」であるとはどういうことかを考えています。多感な時期に女性器切除の問題や、女性性を直視するのは、書かれているとおり目を背けたいことだったと思います。それらに真摯に向き合った文章に私は強さを感じました。先ほども書いたように、藤澤息吹さんも、差別は果たして遠いどこかの問題だろうかと疑問を持ちます。偏見や安易な誤解から差別がどのように生じ、それが伝統にまでなることがあると考察します。差別する側にならないように……ということもまた、私たちの手の届く「平和」であり、同情よりよほど意義ある結論だと思います。

深見亮太さんは「Because I am a Girl 私は女の子だから」を、自身が眠れなくなるほどきちんと読み込み、そして今の自分に何ができるかを考えています。そうして出てきたアイディア、「本のリレー」に私は感動しました。ネガティブな内容の多い本を、友人に手渡すのは勇気がいるけれど、でも、だれにでもできるかんたんなことです。かんたんでありながら、とても重大なことだと私は思います。

今年もまた、本を読んで感想を書いてくださったことに感謝します。ありがとうございました。

最優秀賞　2016年　中学の部

「目の前の一人を幸せに」

関西創価中学校・高等学校 中学2年　**武田 美由紀**

課題図書

「ジャニ、夜には恐怖がふくれあがるんだよ。でも、朝が来て、明るくなれば、きっとまた勇気がわいてくる。」
私は、この言葉がとても心に残りました。私は、恐怖に震えて寝たことはありません。そして「あなたの夢は」と聞かれたら、いくつかの職業を答えます。しかし、同じ時代を生きる子どもたちの中には、「夢は明日も生きて、目を覚ますこと。」と答える子がいます。そして、楽しいはずの学校が、いつ攻撃のターゲットにされるか分からないという恐怖の中で通学して学び、それでも明日の夜明けを待って学んでいる子がいることを知って、とても驚きました。

世界がノーベル平和賞を贈ってその勇気をたたえたマララ・ユスフザイさん。マララさんの住む国では、タリバンという武装勢力によって、極端に不平等な政策が推し進められています。具体的には、女子が教育を受けることの禁止。女性が一人で買い物に行くことや、おしゃれをすることの禁止。そして、全ての音楽の禁止など、同じ時代に存在している政策とは考えられないような制限がかけられていることを知って、とても驚きました。

私たちの生活の中にも様々なルールがあります。私自身も、そのことをうるさく感じたり、めんどくさく思ったりすることが無いわけではありません。でも、そのルールを大切に思うのは、そのルールの意味することへの信頼があるからです。そのルールを大切にすることが「私のためになる」と信じることができるからです。だから「めんどくさいな」とか「少しぐらい」と思うことはあっても、そこに恐怖を感じることはありません。

タリバンは、内戦が続くアフガニスタン付近にあって、初めは「無法状態のアフガニスタンに秩序をもたらす英雄」として歓迎されたそうです。しかし、今では民衆の心が離れてしまい、恐怖による支配を推し進めるしかなくなっていると言われています。

かつて「正義」とたたえられたものが、今は人々を苦しめる。この逆転はなぜ起こってしまったのでしょうか。それは、自分たちの活動の目的は、誰のために行っていることなのかということについて「目の前の一人」を幸せにできるかどうかという考えが、欠けてしまっているからだと思います。大切な自分の家族、友達、同じ社会に生きる人たち。その人たちをどうしたら幸せに、そして笑顔にできるのかということを真剣に考え、勇気をもって声をあげたのがマララさんであったと私は思います。マララさんは、国連でのスピーチで語りました。

「私は訴えます。自分自身のためではありません。すべての少年少女のためにです。」
学ぶのは何のためか、誰のためか、私はそのことを大切に考えて学び、世界の平和に貢献できるリーダーに成長していきたいです。

優秀賞　2016年　中学の部

「教育のために戦った少女」

関西大倉中学校2年　**野口 美沙**

課題図書

2012年10月9日、マララさんはタリバンが支配するパキスタンで下校途中のスクールバスの中で頭を撃たれた。マララさんは、ただ女性も教育を受けるべきだと主張しただけなのに。私は、はっきり言うと勉強が嫌いだ。問題を一問一問解くたびに本当に勉強をやる必要があるのかと考えてしまうぐらいだ。私は母にあなたは何のために勉強しているのかと聞かれた。私は「念のため」と答えた。それ程、勉強をする目的がわからなかった。でも、この本を読んでもし、学校に行けなかったらと考えた。文字が一文字もかけなかったら私は今書いている読書感想文が書けないのだろう。もし文字も読めなかったら、もちろん本も読めないし外に出てお店に行っても何が何かもわからない。このように勉強することがあたりまえな日本を私はとても幸せな国だと改めて思った。マララさんは、「世界のどこに行ってもどんな国でも、どんな宗教であろうと学校に行けない子供が必ずいる」と言っている。だからマララさんは立ち上がり主張したのだ。「一人の子供、一人の教師一冊の本、そして一本のペンが世界を変えるのです。」と。

私がもう一つ驚いたのは、パキスタンでは生まれた時から男と女であつかい方が違うことだ。男の子が生まれると祝砲を鳴らし、女の子が生まれたらカーテンのうしろに隠す。生まれた時から差があるなんて。私は女の子に生まれてとても良かったと思う。なぜなら女の子でよかったと両親が言ってくれるし、叔母も女の子がほしいといつも言っている。大好きなバレエも美しい踊りや衣装も女性らしいところが良いと思っている。私は男の子に生まれたら良かったと思ったことは、一度もない。それは差別なく何でもでき、私の周囲にも差別がないからだと思う。それは、教育のおかげだと思う。

私が感動したのは、マララさんがタリバンに対して怒りを持っていないということだ。
私だったら犯人をうらむと思う。奇跡的に命が助かったけど、マララさんのように素晴らしい人をねらうなんて犯人はひどいと思う。でもこのように怒りを持つことが、戦いを大きくしていくのだとこの本を読んで感じた。マララさんのように、相手を尊重し、違う意見を理解しようと努めることで、世界の戦いがなくなると思う。

マララさんはタリバンに撃たれた少女だとは思われたくない。教育のために戦った少女だと思われたいと言っている。私はマララさんの存在を知り、教育の大切さや平和について考えることができた。今あたりまえと思っている男女平等や、平和もマララさんのような活動家が日本にもいて、私たちの今の社会を作ってくれたのだと思う。私も世界のことをもっと勉強し、世界の人たちの価値観や、文化や宗教について知りたいと思った。

特別賞　2016年　中学の部

「女の子だけど女の子だから幸せになろう」

関西大倉中学校2年　**井上 夏希**

課題図書

フィクションではないんだ。現実なんだ。と、この本を読み進める中、我に返った。私と同じ年齢の少女のあまりにも悲惨な現状を初めて知った。アジアやアフリカの途上国で貧困に苦しむ多くの人々がいる事は、以前からニュースや新聞等で知っていた。しかし遠い国の話で、自分が何かできるわけもないと自分の中で問題視していなかった。

でも、今回この本を読み、女の子だからという理由だけで、強制家事労働や人身売買、早すぎる結婚、女性性器切除等、非人道的な扱いをされ、人としての尊厳を傷つけられ、更には生まれてくる事さえ許されない事を知り、私は怒り悲しくなった。彼女達を取り巻く社会や人々、貧困や慣習、認識が、今現在も彼女達を苦しめ、法律で守られるべきなのに現実にはまだ、6500万人の少女達が学校に通えていないという。

しかし、女子教育の拡充を願うパキスタンのマララさんの活動から、女子教育の必要性に世界中が注目し、国際社会の支援が始まったのも事実だ。そして着実に国際社会共通の重要課題として「女の子問題」があり、多くの人々が状況改善の為に努力している事も知った。

日本でも貧困な国々に金銭、物資の直接的支援にとどまらず、インフラ整備や職業訓練支援等、70以上の団体が加盟するNGOネットワークが女の子問題の支援をしている事を知り、私は少し安心してほっとした。

しかし男女平等で幸せな日本でも、女の子問題は存在しているのだという。男女格差が少ない程上位に格付けされるジェンダーという成績が、日本は136ヶ国中105位で、先進国と呼び経済的に豊かでインフラも整っているのにこれほど下位なのは日本だけだと知った。その理由は経済分野と政治における女性の進出の遅れだそうだ。

そんな中、東京都知事選で、逆境の中、選挙戦を戦い抜いて初の女性都知事が誕生した。同じ女性として誇りに思えた。一生懸命頑張る姿は男女の性別を越えて美しく応援したくなる。だから、絶対女性だからと低い価値と決めず、その人の人間性や能力で評価されて、その上で女性の視点でみれる所があれば、更なる魅力と考えたい。

最後に、彼女達自身を取り巻く苦しい経験や環境が彼女達にこのままではいけないという強い思いを起こさせ、パワーとなって少しずつ人の気持ちを変化させ支援されるべき立場となった。夢やビジョンが叶えられる様、男の子も国際社会も動き出している。そんな中で、私ができる事は何だろう。やはり彼女達の現実を知って考える事だと思う。そして私は今、彼女達のパワーに後押しされて、自分自身の夢である看護師になり、いずれは、その専門職の技術と知識を彼女達に伝えられる様な仕事をしたい。彼女達の勇気と努力のパワーを支援して、人としても女性としても自立して誰かを幸せにしていきたいと思う。

最優秀賞　2016年　高校の部

「『女』であること」

広島女学院中学高等学校 高校2年　**水野 茉梨香**

課題図書

「女」であることがこわい。今、私の心はやり場のない怒りと悲しみ、また、無知な自分に対する情けなさ、何もできない状況への悔しさ、もどかしさに満ちている。様々な感情が入り混じり、わきあがる。たえきれずあふれて、涙となってこぼれ落ちる。とても熱かった。なぜ私はこんな感情を抱いているのか。何が私を突き動かそうとするのか。

この本は、「ワリス・ディリー」という女性の「真実の物語」だ。話は当時13歳だったディリーが、父に老人との結婚を命じられて、家出する場面からはじまる。最終的に国連特別大使となった彼女の人生は、衝撃の連続だった。中でも一番衝撃的だったのは、「女子割礼」だ。本を読むまで知らなかった言葉だ。吐き気がする。激しい怒りと悲しみ、底なしの恐怖におそわれる。本を読んだことを後悔した。目をそむけたかった。自分の身体の一部が、男の勝手な欲望のために切り離される。麻酔なしで。悲鳴がまわりに聞こえないように、夜明け前に。藪の中で。ひっそりと行われる。出血多量やショックで命を落とす子も少なくない。儀式によって殺された女の子はまるで、もともと存在しなかったかのように隠される。たとえ死ななくても、後遺症によって苦しみ続ける。そんな恐ろしい儀式が当たり前になっている。なぜ「女」として生まれたばかりに、こんな苦痛をうけなければならないのか。しかも男のくだらない支配欲のために。私は猛烈な怒りを感じる。しかし同時に私にはとても情けない感情が生まれる。安心感だ。「自分はこんな目にあわなくて良かった」と思ってしまう。日本で生まれ育った私のまわりに「女子割礼」は存在しないからだ。でも自分に起こり得なければ無関係なのだろうか。「女子割礼」は男性優位の社会で行われる儀式だ。現在、男尊女卑の問題が注目され、男女平等が叫ばれている。それでもなお、男性優位な面は多い。男性優位な社会であれば、「女」の私は不利益を被る。つまり、「女子割礼」は私に全く関係がないとはいえないのだ。

では、私には何ができるだろうか。今できることは、「知ること」だけだ。私はまだ高校生。今は知識を蓄える時だ。また、大学生になったら法律を学ぼうと思う。世界はルールが基盤となって動いており、法が最も効力を持っているからだ。そして、大人になったら蓄えてきた知識を活用して、真の男女平等が実現するように、女性がこれ以上苦しまない社会にするために活動したい。

かなり抽象的になってしまったが、それは私が無知だからだ。「女子割礼」が行われ続けているのは無知と盲信のせいだという。ディリーも最初は無知だった。しかし、多くのことを学んで真実を知り、自ら行動を起こした。私はもはや無知ではいられない。「知ること」が、私にとって「女」であることへの恐怖をぬぐいとることであり、「女」として強く生きるための第一歩になるのだから。

優秀賞　2016年　高校の部

「個性を差別する」

大妻中野中学校・高等学校 高校1年　**藤澤 息吹**

課題図書

私はこの本を読んで、女の子として生まれたという理由だけで彼女たちに襲いかかる、あまりに残酷で悲しい現状に、胸が苦しくなった。彼女たちはとてもかわいそうだと思う。しかし、私たちにできることは、彼女たちに対する同情だけだろうか。

この本を手に取った時、タイトルである「わたしは女の子だから」を見て、だからの続きが知りたい。そう思った。

読み進めていくうちに、女の子だということが原因で、彼女たちが大きな被害を受けていることがわかった。女の子に生まれたということは変えることのできない事実であるにもかかわらず、差別をする。差別される側になったことのない人間が、差別される側の苦しさを知らずにする行為だ。女性より男性の地位が上である、ということが伝統として根付いてしまっていることが一番の問題だと思う。伝統という言葉を聞くと、自然にそれが正しいことだから長い間続いているような気がしてしまう。伝統に逆らう勇気。日本のように、性別による差別を無くそうとする企業、団体が格段に少ないアフリカでは、たった一人で立ち上がって、自分を守ってくれる人がいない恐怖、一つ一つの発言の重みと常に戦わなければならない。

ところで、日本には差別がほとんどないような気分になってはいないだろうか。「わたしは女の子だから。」この言葉だとピンと来ないかもしれないが、生まれながらにしてその人が持っている「性別」「身長」「見た目」などの個性に基づいて、勝手なイメージを持ってしまうことも多い。しかし私は、そう思ってしまうことはアフリカの差別をする側の人たちと、同じだと思う。昔の人が、男性は欲のまま生きて、女性が我慢するという伝統を作った。それをこの時代まで常識のように続けてしまっているアフリカ。変えることのできない個性を否定する言葉を使い続け、それらの理由でいじめを起こす日本の人々。ほとんど同じではないだろうか。

この本を手に取る人はたくさんいると思う。この本を読んだ私たちが日本人としてできることは、ただ彼女たちにかわいそうだと同情することではなく、自分が差別をしていないかどうか、考えなおすことだ。そしてもし自分が差別をしている側だと気づいたなら、被害者の気持ちになって、行動を改めるべきである。この本を読んだ人ならきっと、被害者がどんなに苦しい思いをしているかわかるだろう。

まだ私は被害を受ける側になったことがない。気づかぬうちに、誰かを苦しめることにならないか、細心の注意を払っていきたいと思った。また、当たり前だと思っていた悪い伝統を変えようとする勇気を持ちたい。

特別賞　2016年　高校の部

「本のリレー」

学習院高等科3年　**深見 亮太**

課題図書

「ぞっとするほどの貧困や不正を目の当たりにして、夜も眠れなくなったことが、今まであったろうか」ザブハドラ・ベルベースさんの書かれた「返答」の中の一文だ。私は今、正にその問題に直面してしまった。

途上国での貧困問題は、新聞やテレビのニュースなどにて、ある程度は知っていた。しかし「チェンジ」のリポートを読み、あまりにも衝撃的な内容に、私はとうとう眠れなくなってしまった。本当にこれが、女の子たちの日常なのだろうか。男の私は驚愕した。

小学校の校庭に「ものにつられてセックスはしてはいけません」との立て看板があるとのこと。このような看板を立てなければならないほど、この国の少女たちは貧しく、ひもじい思いをしている。そして、なによりそれに付け入る男たちがいることに、私は悲憤慷慨の念に駆られた。

ウガンダに取材に行かれた、マリー・フィリップスさんは「学校のための基金を設立して、女の子たちに、まともな寮やトイレを作りたい」そう語っていた。しかし、設立はお金さえあれば何とかなる問題ではない。大切なのはその先にある、それらを維持するために、国家の力が必要不可欠なのだ。そこに関わる人々は設備の必要性を唱え、まずは住んでいる地域の人たちへの啓発活動を国が率先して行い、女の子たちへの性的虐待を取り締まることが先決だ。そして女の子たちにも、なぜ禁欲をしなければならないかを、根気よく指導し、負の連鎖を断ち切らなければ、いつまで経っても、本当の意味での自立は出来ない。こうして理想を言うのは簡単だが、昔からの風習を変えることが、非常に難しいということは痛いほど分かっている。分かっているからこそ、私は何もすることが出来ない自分がもどかしくて、情けなくなる……。「送金」の中に出てくるエレナは、この本の中で唯一の希望だ。この話には、母親からのエレナへの依存がついて回る。子育てがきついから、留学先から帰ってきてくれと、母親は電話口で再三せがむ。しかしエレナは、そのたびに父親が残してくれた手紙の言葉を思い出し、心を鬼にして貧困から脱出した。私はエレナのように、強い信念を持って生き抜いていく女の子が、これからも出てきてくれることを切に願う。

こうしてペンを取っているうちに、私はあることを思いついた。自分に出来ることをしていこうと。声にならない女の子たちの、叫び声がいっぱい詰まったこの本を、ひとりでも多くの人に読んでもらおうと思う。まずは明日、友人にこの本を薦めてみよう。読み終えたら、

「返さなくていい、誰かに手渡して！」

と、伝えよう。そして「本のリレー」が、どこまでもどこまでも続いていってほしい。何年掛かるか分からないが、本を読んだ人たちによって、女の子たちの未来が、今日より少しでも良い世界になっていくことを願って。

2015

［課題図書］

『マララ
教育のために立ち上がり、
世界を変えた少女』

マララ・ユスフザイ、パトリシア・マコーミック著

道傳 愛子訳

岩崎書店

「わたしは13歳、学校に
行けずに花嫁になる。
未来をうばわれる2億人の
女の子たち」

ブラン・インターナショナル
職員著

合同出版

「わたしはマララ
教育のために立ち上がり、
タリバンに撃たれた少女」

マララ・ユスフザイ、
クリスティーナ・ラム著

金原瑞人、西田佳子訳

学研

「Because I am a Girl
わたしは女の子だから」

アーヴィン・ウェルシュ、ティム・
ブッチャーほか著

角田光代訳

英治出版

後援：国際連合広報センター、外務省
協力：公益社団法人ガールスカウト日本連盟、NPO法人16歳の仕事塾

2015

講 評

審査員長　角田　光代

指定された本を読んでくれてありがとうと、今年も私はまず思います。指定された本はみんな、中学生、高校生のみなさんにとって、けっして愉快で爽快な読書体験を与えてはくれないと思うからです。それでもみなさんは一冊の本を読み、自分と同世代のさまざまな女の子たちに会ったことでしょう。マララさんのように勇敢な女の子もいれば、学校にいけない子も、誕生を祝福されない子も、道具のように酷使される子もいます。多くの方が、その現状に驚き、怒り、そして、自分のめぐまれた環境に思いを馳せ、「知る」ことの重要さに気づいたと書いていました。「知る」ことができたから、読んでよかったという言葉に、私はとても感動し、また、みなさんの作っていくだろう未来をたのもしく思いました。

中学生の部の中込蓮さんは、男の子として、こうした本を読むのも、感想文を書くのも、ちょっと抵抗があったのではないかと思います。異性のデリケートな問題だからです。けれど彼は真っ正面から本のなかの女の子たちと出会い、そして、男として自分は何ができるかを真摯に考え、その思いを書いてくれました。その姿勢に胸を打たれました。また、本を読んで疑問に思ったことを、ひとつひとつ自分で調べていく粂瑞紀さんもすばらしいと思いました。ボランティア活動に参加したり、寄付をするだけでなく、こうして調べ、理解していくことも、私たちにできることのひとつなのだと思います。そしてまた、安田都々さんの感想文の出だし、本からの引用文に私もはっとさせられました。自分に何ができるか考えるのは、かわいそうなだれかを助けるためではない。世のなかにたいして、自分がいやだと思うこと、そうじゃないと思うことを貫くことなのだと、あらためて考えさせられました。

また、多くの方が、「女性でも教育の受けられるこの国の私たちは幸福だ」と書かれていたなかで、ただひとり、日本における不平等について考え、書いた方がいます。米子佳蓮さんです。私たちは男性と平等に教育を受けられますし、そのことで命を狙われることはありません。けれども、では男性と女性がまったく同じ権利を持っているかといえば、そうではないというのが現実です。そのことは、社会では見過ごされやすいことでもあります。それをきちんと拾い上げ、ここに記した米子さんの感性を私はすばらしいと思います。また、伊藤可子さんは、学ぶことで世界が広がっていくことを、自分の体験を思い出しながら重ねて描き、とても印象深かったです。仲間愛梨さんの書かれた感想文は、率直で強い。男子同級生との会話や、母親との会話をとおして、私たちの生きる社会も、けっして「気楽」なわけではないのじゃないかと私は考えさせられました。ボランティア＝偽善、という考えは、なぜかこの国にずっと前からあり、今もあり続けます。大きな疑問です。なぜそうなのか、を考え、自分なりの言葉にし続けることもまた重要なのだと思います。

みなさんの感想文で、私も多くを気づかされ、考えさせられました。本を読んでくれて、それから、率直な言葉をぶつけてくれて、本当にありがとうございます。

最優秀賞　2015年　中学の部

「ぼくは男の子だから」

関西創価中学校・高等学校 中学1年　**中込 蓮**

課題図書

国際NGOプランが展開しているグローバルキャンペーン「Because I am a Girl」。
このキャンペーンの読書感想文コンクールに僕は本書「Because I am a Girl　わたしは女の子だから」を選んだ。キャンペーン名がそのまま本の題名になっていたから。そして何より、この本を読めば「自分は男の子としてどうすべきか、何をなすべきか」が見えてくると思ったからである。

本書は、七人の作家たちがそれぞれ現地におもむき、女の子が受けている不当な扱いを目の当たりにした上で書いた作品が編集され集められたものである。

「いきたいところに向かう道がなければ、自分の道を自分で作らないといけないの。」僕が最初に心を突かれた言葉だ。そして、「人の心にはほんものの力がある。」彼女は、この世の厳しさとそれを乗り越えられる人間の無限の可能性を伝えているのだと感じる。

「アフリカでは、年長者がいちばんよくわかっているのさ」違う。現地の人もそれを分かっているはずだ。自分が小さい頃に受けた不当な扱いを、なぜまた自分の次の世代に与えてしまうのだろう。良き伝統は受け継ぎ、悪しき伝統は正していかなければならない。

一人の人間の強い信念も、厳しい現実の前では無意味なものとなってしまうのだろうか。いかに強い信念であっても、それを貫き通すのは決して容易ではないと改めて思った。

「卵巣がその人生を作っている」この言葉がこの本の中で一番心に突き刺さった。というより、貫かれた感じだった。現地の現状をそのまま伝えると、この言葉が出るのだと思う。避妊、中絶は許されない。そして、性行為が女の子の責任だという風潮。心の底から煮え滾るような怒りが込み上げてくる。怒りという言葉では表せないほどだ。そしてそれと同時に、「なんとかしたい」と強く思うようになった。そのためにはどうすればいいのか。中学1年生の僕が現地に向かうことは不可能だ。でもそういう取り組みを行っているプラン・ジャパンなどの団体に、募金という形などで協力することならできる。そう思わせてくれたこの本には感謝している。

僕はこの本から色々なことを知り、学んだ。そして僕たちは、同じ「地球市民」としてこの世界の現状を一つ一つ変えていかなければいけない。

僕は、女の子ではない。男の子だ、僕たち男の子は男の子としてこの現状とどう向き合わなければならないのだろうか。

「わたしは女の子だから」の先に今の現状があるなら、「ぼくは男の子だから」の先には、「自分の欲望に左右されず、自分のたった一度の行為が相手の人生を狂わせるという自覚を持ち、同じ人間として大切にする」としなければいけない。いや、そうあるべきである。

優秀賞　2015年　中学の部

「世界で起きる問題を知って」

関西創価中学校・高等学校 中学1年　**粂 瑞紀**

課題図書

基本的に花嫁と聞けば、幸福や美しさなど周りの人も、自分もプラスのイメージをもつことが日本では多いと思います。しかし、この本を読んでそうではない国があるということを知りました。元々、小さい時から母にはいろいろなことを聞かされていて、女性差別がなくならないこと、女性器切断なども知っていましたが、この本を読みより深く知ることができました。

読んでいて二つほど思ったことがあります。女性差別などは発展途上国に多い問題ですがなぜ貧しい家族は貧困のままなのかということと、女性と男性の差別はどうしておこるのかということです。

まず、なぜ貧しい家族は貧困のままなのかということで、読んでいて「貧困の悪循環」というものが気になりました。それを見て、結局は子どもに教育が行き届かないことで、一家族としても一つの国としても、貧困からぬけ出せないでいるのだと思いました。この悪循環をたち切るには、まず男女関係なくすべての子どもに教育を受けさせることが大切だと思いました。その時、どんなに貧しくても将来の自分の家族や国のことを思って、がん張ることが大切だと思います。また、幼なくして結婚させられることについて、理由の一つにダウリーというものがあると知りました。年が増すごとに金額が増すのだから、親が早く結婚させたい気持ちも分からなくはないです。けど、結婚させられる娘にとっては嫌でたまらないと思います。私なら、愛してもいない、しかも何歳も年上の人と結婚だなんて絶対に嫌です。しかし、世界には実際に私と同じ位の歳の人がそういった結婚をしてると思うと、胸が痛くなります。

次に、なぜ男女差別が起こるのかということで、調べてみて理由の一つとして戦争があると知りました。戦争など武力での争いの際、力の強い男性が女性よりも優位な立ち位置に立ってしまうということです。そのことにより、男性も「常に男らしくあらねばならない」という偏見に苦しめられていることを知りました。なので、差別が起こる原因をさぐり、解決しようとしても人間の生まれもったものなので仕方がないと思います。それより、これからのそういった意識を改善させていくことが大切だと思います。男女どちらが欠けても、人類の将来は危ういので、性別の壁を低く、薄くしていくことが大切だと思いました。

男女差別は今の日本にも残っている部分はあるので、決して他人言ではないと思いました。こうして書いているよりもこの問題は、本当に難しくて大変な事だと思います。なので、まずはそのことについて意識を正しくもち、また人にも伝えていけるようになっていきたいです。

特別賞　2015年　中学の部

「教育を受ける」

弥富市立弥富北中学校3年　**安田 都々**

課題図書

「アフリカやアジアの女の子はかわいそう。という気持ちだけでは問題の本質を見失ってしまいます。」この本にはこんなフレーズがでてきます。私はこの本を読んでいて、このフレーズを読むまで「発展途上国に住む女の子はかわいそうだ。日本に生まれてこれた私はラッキーで感謝しなければならない。」と何度か思ってしまったと反省しました。

そして私は自分にできることについて考えました。私ができることは知る、伝える、活動に参加するということだと思います。「知る」それは、テレビで報道される他国の子供達の現状を知る。日本の男女差別の問題を知る。差別問題を支援する活動や企画があることを知る。この問題を改善していくために、知らなければならないことはたくさんあります。なかでも私がこの知るを通して心に残っているのはマララさんの教育への思いです。マララさんの演説には私にも理解できる英語の文章もあります。しかし、とても深い意味を持つ言葉だと思います。私はこのマララさんの演説から教育を受ける大切さを感じましたし、世界の子供達が教育を受けることができるようになれば世界は変わることができるんだと感じることもできました。これを機に知った男女差別や男女平等の大切さを伝えていくことも大切だと思います。その人の考えが変わるチャンスだと思うからです。

あとは、ボランティアへの参加、支援団体のサポート、寄付などに積極的に参加することです。もちろん私はこの本を通して、日本の男女差別の問題も深刻だということを知りました。しかし、他国の女の子のなかには教育すら受けられない子もいるということを知りました。日本の差別問題は日本で解決していかなければならないと私は思います。しかし助けを求めている女の子達が世界にはたくさんいるのです。だから私は、世界にも目を向け、日本だけでなく、世界が変わっていけるように困っている女の子達を助けてあげたいと思いました。

世界中の子供達が最低でも九年間の教育を受けられる。

戦争や争いごとのない世の中になる。

男女差別ができるだけはやくなくなる。

私はこんな世の中になったらすばらしいと思いました。

この本を読んで、毎日安全に学校に行けること、教育が受けられること、毎日三食以上の食事ができたり、ゆっくりと寝ることができたり、家族や友達と話ができること、それはとても幸せなことなんだと改めて考えることのできる良いきっかけとなったと思います。これから私は、もっと深く知ることそしてそれを行動にうつしていけるような人間になっていきたいと思いました。

最優秀賞　2015年　高校の部

課題図書

「より良い世界へ」

富士見中学高等学校 高校2年　**米子 佳蓮**

この本を読む前、マララ・ユスフザイさんに対する私の印象は、失礼なことに良いものとは言えませんでした。なぜなら、マララさんは特別な身分で、特別な教育を受けた「選ばれた人」だと勘違いしていたからです。ところがこの本を読んで、私の先入観は間違っていたと分かりました。同時に、マララさんはクーデターによって度々変わる不安定な政権下で、様々な権利を侵され、命までもを狙われながらも女性の権利を訴え続けている、とても勇敢な女性だと知り、自分の無知を恥じました。

日本は、世界でもトップクラスの教育水準を誇っており、私が教育を受ける上で男女間での差別は感じたことがありません。しかし、本当に日本における男女間差別は存在しないのでしょうか。

日本人の共通の固定概念として、「男性は仕事で女性は家事と育児」というものがあります。私の家も例外なくそうであり、それに関して不幸に感じたことはありませんでした。しかし去年の夏、海外に短期留学した際に、夫婦共働きで、家事や育児を分担している、私にとっては新鮮な家族の在り方を体験し、私の中に「平等に教育を受け、同じように仕事が出来ても家族のために仕事を辞めたり休んだりするのが女性ばかりである事はおかしいのではないか。」と疑問が生まれました。

小さな頃から将来の夢を模索し、将来に生かし、自分の糧とする為に勉強するよう教育を受けてきましたが、周りの大人に「男性と同じように働いて、家事や育児は家族で分担できるような家庭を作りたい。」と夢を語ると、「それは大変だから家事や育児に専念した方が良い。」という内容の事を勧められました。大それた夢ではなく、他の国では普通の事を日本でも行いたいと言っただけなのにです。

どんなに努力してやりたい仕事に就いたとしても、家庭を持つ時に辞めてしまうのなら、教育を受けた経験は無駄にはならないとしても、その知識を生かして社会に貢献する事は難しくなります。そして、家庭の仕事は、外で仕事する事と負けず劣らず大変で重要な事ですが、それと女性を無条件に結びつけるのは間違っていると思います。

私はマララさんのように大勢の前でスピーチをする勇気も、沢山の人を感動させられる言葉を考えることも得意ではありませんが、一人でも多くの女性が社会で活躍することが、後の世代への自信に繋がると信じています。

優秀賞　2015年　高校の部

課題図書

「受け入れてはいけない伝統」

南山高等・中学校女子部 高校3年　**伊藤 可子**

生きている。こんなにも困難な状況で、一所懸命に生きている。私は、強い生命力を持つ人達に触れて、嬉しくなった。

「うーっ」とうなってみた。あまりの理不尽さに……。彼女達の身の上に救いのなさを感じて、頁を繰る手が止まった。通学鞄にはいつも図書館の本が数冊、という私には今までなかったことだ。「あれ？私、逃げようとしてる。」私は知りたくないのだ。同じ年頃の同性の人々だからこそ、身につまされてしまうのだ。だが「いじめを黙って見ているのは、いじめをしたのと同じ」という先生の話を思い出した。「わたしは女の子だから」問題から逃げ出すことは、容認することにつながる。「アフリカでは、年長者がいちばんよくわかっている」ことにしてしまう。

明るい色とかわいい絵。この本の装丁は、本来、少女のあるべき姿だ。それとこの本の内容のギャップに怒りを覚えるべきだろう。彼女達をかわいそうだと感じるべきだろう。救い出すために何か行動を起こそうと考えるべきだろう。私も確かにそうだった。本を読み進めている間は、彼女達を憐み、自分にできることを考えていた。だが、本を閉じた時、対局にある気持ちが芽生えた。嬉しい。彼女達に会えたことが。

小学四年生で「あほろくの川だいこ」という本に出会った時を思い出した。四年生の社会科は、主に住んでいる県について学習する。愛知県には「輪中」とよばれる所がある。「あほろくの川だいこ」の舞台は、輪中だ。この本を契機として、現地での見聞も含め輪中の歴史や暮らしなどを調べた。学びを深めることで、教科書や資料集での学習では知り得ないものがあることを知った。いろいろな物事には、奥に潜むものや思いがある。深く学ぶことで、奥に潜むものや思いを想像し、他へ気持ちを寄せることができる。学ぶことで、洞察力を得られると、私は考えている。つまり教育は愛へとつながる。

生命力あふれる彼女達が教育を受けたら、どんな能力を発揮してくれるだろう。彼女達が発揮する能力は、彼女達の子ども、家庭、コミュニティを少なからず変えるだろう。そして、その変化は、世界的にも大きな利益を生むはずだ。

ジェンダールールや伝統を変えるのは難しい。だが、放っておけば、今のままだ。彼女達の能力は埋もれたままになってしまう。マララさん襲撃で知った、教育を受けさせてもらえない女の子達の存在。この本で知った更に過酷な少女達の運命。世界中の人に、この不条理な運命を知ってもらうべきだ。知ることは、行動の原動力となる。世界の多くの人が知れば、きっと彼女達の運命は変えられる。私は、身近な友人に話して、知ってもらおうと考えている。「彼女の夢」のベンドゥーの「だれかが都合よく解釈した伝統をかんたんに受け入れてはいけない。」という言葉と共に。

特別賞　2015年　高校の部

課題図書

「私も女の子だから」

山口県立宇部高等学校3年　**仲間 愛梨**

「私には私の、みんなにはそれぞれの、ストーリーがあると思います。」去年インターハイに行った先輩の言葉を、この本を読んで思い出した。この本に取り上げられた女の子たちの話は一例にすぎず、ありふれた話なのだと思うと、ぞっとする。

高校3年生になってやっと、「女である」と自覚するようになった。友人との会話や保健の授業で性に関する知識もおのずと耳に入ってくる。授業中に「もしも今妊娠して(させて)しまったら？」をグループで話し合った時、苦笑いしながら「逃げる。」といった男子の顔が忘れられない。日本のような先進国でさえ、望まない妊娠や性的虐待で傷つき、苦しんでいる女の子は数多くいるだろう。自分は慎重でいよう、切実にそう思った。こうして自分を女として意識し始めた今だからこそ、この本の内容をより身近に、よりリアルに感じることができた。

レイプ、売春婦、女性性器切除、人身売買。私にとってはテレビや映画の世界の話だった。「世界には女性差別の激しい国がある」という何となくの知識はあったが他人事だった。こんなにも酷い、惨い目にあっている女の子がいるなんて知らなかった。同性として、許せない、何とかしたい、と思った。「同性として」なんて気持ちが生まれるとは、この本を読むまで思ってもみなかった。でも、きっと女性なら、特に年の近い少女なら一層「同性として」放っておけないと感じるだろう。

私の夢は「グローバルな仕事で誰かの役に立つことがしたい」という曖昧なものだった。この本を読み終えてその思いはさらに強まり、「不当な扱いを受け続けている女性を助けたい」「こんな惨事が毎日起きているということを世界中の人に知らせなければ」と思った。

私の母は、ボランティアやNGOに私が興味を持ち、参加したいという話をすると、大反対する。「自己満足にすぎない」「偽善者のすること」「娘には普通に幸せになってほしい」と。母の言葉は正しく、理にかなっていると思う部分もなくはない。けれどプランの活動は「女の子だから」という理由だけで想像を絶する、酷い仕打ちを受けている女の子たちを助けている。私がその活動に参加して救える女の子が一人でもいるのなら、この上なく幸せだと思う。

「自分の娘には幸せになってほしい。」

国も人種も関係なく、どの母親にも共通する願い。少しでもその願いの役に立ちたい。私も彼女たちと同じ、女の子だから。

2014

［課題図書］

『武器より一冊の本をください
少女マララ・ユスフザイの祈り』

ヴィヴィアナ・マッツァ著

横山 千里訳

金の星社

『貧しい国で女の子として
生きるということ』

遊タイム出版編、
プラン・インターナショナル
編集協力

遊タイム出版

「Because I am a Girl
わたしは女の子だから」

アーヴィン・ウェルシュ、ティム・
ブッチャーほか著

角田 光代訳

英治出版

「わたしはマララ
教育のために立ち上がり、
タリバンに撃たれた少女」

マララ・ユスフザイ、
クリスティーナ・ラム著

金原 瑞人、西田 佳子訳

学研

後援：外務省　協力：公益社団法人ガールスカウト日本連盟

2014

講評

審査員長　角田　光代

　みなさんにとって、こんなにつらい読書はなかったのではないでしょうか。たいていの本は、共感や興奮や、なぐさめや冒険を与えてくれますが、この課題本が与えるのは、女性にとってつらい事実です。こうした本を読み進めるのは、みなさんの年齢ではとくにつらかったと思います。それでも読み、こうして自分の言葉で感想を伝えるみなさんに、私はまず、心から敬意を表したいと思います。中学生、高校生のみなさんは、それぞれ本を読み、自分が彼女たちと同じ女性という性別であること、教育を受けられることはじつに恵まれていることだと、はじめて気づいたその驚きが、いきいきと描かれています。怒りを覚え、戸惑いを覚え、恐怖を覚え、それをみなさんはすなおに書き綴りました。そしてさらに、ではなぜ教育が大事なのか、差別をなくすにはどうすればいいのか、ということまで、多くの人が考えを進めていました。将来の具体的な目標を得た人もいました。そのことを、こうしてきちんと自分の言葉で書くことができるのは、すばらしいことだと思います。

　とくに心に残ったのは、中学生の部では若松ゆいさんが、「ひとりの少女が国を変える」で書かれた、学校という場の役割です。若松さんは、教育だけでなく、友人や先生とまじわりを持つことで、想像力や思いやりを得ることができると書いています。まさに、学校にいかないことで奪われるのは、学問の機会だけではないのだと、あらためて思い出しました。高校生の部では伊藤正子さんの「誰も私の行動を決められない」。祖母の言葉から、彼女は「学び」を体感した経験を持ちます。そこから、教育は私たちに何を成すのかを考察していきます。その考察のなかに、やはり「思いやり」「想像」といった言葉が出てくるのが印象的でした。

　「五人の少女たちのメッセージから考えたこと」を書いた熊木ひと美さんの文章からは、読むことを通じて、未知の世界の少女たちとまさに出会い、そこから、未知の扉を開けたことがうかがえます。「すべての人に平等な教育を」の福住旺穫さんは、こんなにも難しい言葉を自分のものとして用いていることにまず驚きました。男子の生徒さんがこの本を読み、この問題に興味を持ってくれたことに、私はものすごくたのもしい気持ちになりました。未知の扉の向こうあるのは、うつくしい光景ではないかもしれませんが、二人は勇気を持ってその景色を見つめています。

　高校生の部の渡邉清子さんは「私の願い」で、「Because Iam a girl」の作品に触れながら、自分の学校のカリキュラムで、具体的に何ができるかをさぐっています。「『私はマララ』を読んで」の上野結羅さんも、渡邉さんとは異なる意味合いで、将来の希望を明確に言葉にしています。不平等を批判するのではなく、理解し、そこに向かおうとする姿勢に打たれました。

　マララさんのようではけっしてない、この無力な私にいったい何ができるのか。ここに書かれたひとりひとりのささやかな思いが、世界をきっと変えていくのだと、読んでいて思うことができました。

最優秀賞　2014年　中学の部

課題図書

「一人の少女が国を変える」

名古屋市立楠中学校3年　**若松 ゆい**

「ひとりの子ども、ひとりの教師、一冊の本、そして一本のペンが、世界を変える。」

ニューヨークの国連本部で、世界に向けて教育の大切さを訴えた一人の少女、マララ。彼女が生まれたパキスタンは、女子が教育を受けることが一部の人達によって禁止されている。

2012年10月9日、15歳のマララさんは下校途中のスクールバスの中で至近距離から頭を撃たれた。それは彼女を狙った犯行だった。何故彼女はこのような事件にあってしまったのだろうか。

マララさんの父は学校を経営していた。そして、彼女はさまざまな報道機関を使い、パキスタンの現状や教育の重要性を世界の人々に訴えた。そのことがタリバンの思想に反したのだ。パキスタンでは、教育を受けてない人が多く、タリバンの思想を支持する人々が増えていた。一部の情報や偏った考えに傾倒した人々によって、多くの人が殺害されているのだ。

私は、この事件を知った時、驚きしかなかった。日本では、中学生まで教育を受けることが義務づけられているので、私はパキスタンという国を想像することができない。私は正直、学ぶことは嫌いだった。朝早く起きて学校に行くのも面倒だと思ってしまう。しかし、マララさんのことを知り、学ぶことの本質や私がどれだけ恵まれているのか改めて感じることができた。

知らないことを学ぶと世界が広がる。読み書きや計算ができないと日常生活に支障が出てしまう。すべての人が平等に将来働けるように、知識を身につけるのが教育の目的だと思う。例えば、理科で天気について学んだ時、雲の形から季節がわかることを知った。知識を日常生活の中で活かすことができれば、学ぶ意義が実感できる。一つ一つの知識がものの見方や考え方を豊かにしてくれるのだ。

学校には、これ以外にも、もう一つ重要な役割があると思う。先生や友達とふれ合うことで、相手の気持ちを考えたり、自分にはない素敵な個性を知ることができる。一つのことを一緒に成し遂げた時には、協力や助け合いの大切さや素晴らしさを感じる。集団の中で生きる方法や楽しさを教えてくれるのだ。たくさんの人と知り合うことで、自分とは違う考え方も認められるようになると思う。

私達は身近な大人、友達だけでなく、この学校という場を与えてくれる国に支えられて生きている。マララさんのように、よりよい国のために何ができるか考え、実践していくのは、今の私達にもできるはずだ。それは、歴史の事実から何がいけなかったのか考えるように、学んだ知識からこれから何をすることが大切なのか気づくことだ。私は、学び、考えることを続けたい。これから、マララさんのような人がこの世界に増えることを願い、私も日々頑張りたい。

優秀賞　2014年　中学の部

課題図書

「五人の少女たちのメッセージから考えたこと」

鎌倉市立大船中学校2年　**熊木 ひと美**

「人」として生きること、それはどんなに大切なことだろう。私はこの夏、一冊の本を通して出会った少女たちに教えられた。

私たちの命は、女性という性が存在しなければ、生まれてくることは出来ない。そして、生まれてくるひとつひとつの命は、かけがえのないもの。その命は、親はもちろん、環境や国を選べない。だからこそ、この世に存在する命は、国籍や性別に影響を受けることなく大切にされなければならない。この本から発信されたメッセージは、私にそのことを強く意識させるものだった。

五人と出会うまで、私は自分が女の子として生まれて、それが幸せなのか、不幸なのかなんて、考えた事すらなかった。考える必要がないほど、恵まれていたのかもしれない。しいて言うならば、報道される社会問題の中に、女の子を標的とした性犯罪の事件がある度、どうして女の子をそういう目で見るのか、嫌だな、怖いな、気をつけなければ、と思ったことはある。しかし不幸だと感じたことはなかった。

日本では、中学3年生までは義務教育期間でもあり、法によって教育を受ける権利を保障されている。基本的人権の尊重、平等権、自由権、様々な観点から自分らしく生きていく権利が保障されている。しかし、五人の境遇は、自分の身に同じことが起こったら…と考えても想像を絶するものだった。望まない妊娠と出産…せめて私にできることは、同じ地球に生きる同世代の少女たちの現実に目を向けることだった。ちょうど私がそう感じた頃、国連人口基金事務局長、アンネ・ビルギッテ・アルブレクトセンさんがコメントを寄せた新聞記事を見つけた。「教育の機会奪う児童婚」という見出しは衝撃的で、記事を読み、この本で出会った少女たちのことが直ぐに浮かんだ。10歳から19歳の思春期の少女たちは世界に6億人いること、途上国では教育や保健医療サービスを受けられない若者が増えていること、3人に1人が18歳になる前に、9人に1人が15歳になる前に結婚し、それは家族・親戚からの強制によるもの、1日あたり800人の妊産婦が命を落とし、10代前半の妊娠では死亡リスクが高いとあった。また、世界保健機関による途上国の調査結果では4人に1人の男性がレイプの経験があり、少女たちは人身売買や性産業での暴力に日々さらされているとあり、私は言葉を失った。

私がこうした同世代の仲間に向けて何が出来るのか、正直、答えは見つからない。少なくとも今はその事実を知り、学ぶことが出来る環境に感謝をする。そして真の国際社会に向けて、将来、何かを発信できる女性になりたい。微力でもいいから、彼女たちの窮状をサポートする「人」になりたい。何か…は、何だろうか…。何かを探求しながら、日々学ぶことを、この夏決意した。

特別賞　2014年　中学の部

課題図書

「全ての人に平等な教育を」

目黒区立東山中学校3年　**福住 旺穫**

イスラム教徒同士の争いから、一体、何が生まれるのか。本来、心の安寧を説き、人々の痛みを緩和し、希望を与えるはずの宗教が、ジハードの名を借りた殺戮に利用される。止む事のない報復の連鎖の中で生まれたものは、荒れる国土、治安の悪化、貧困、心身共に傷つき襲撃に怯える毎日の生活と教育の場を奪われ、夢を諦めざるを得ない多くの子供達。

メディアで紹介される現実は、今の日本で暮らす私には想像を絶する光景である。しかも、タリバンは、厳格で非寛容な日常生活への制限に加え、女性にはさらに多くの規制を強いた。同じ地球に生きる人間として、皆同じ権利を有するはずだ。私は、たまたま平和な日本に生まれ育ったに過ぎない。コーランの思想は男女平等ではなかったのか。1300年以上も前のシャリーアも、その時代と地域に合わせ、「命」「人権」を最優先事項として柔軟性を持たせて解釈し運用することはできないのだろうか。

故ブット首相のショールを身にまとったマララの国連演説は、特集番組を含めて何度も見た。ブログで世界とつながり、女性の人権と教育権を訴えて襲撃され、瀕死の重傷を負った彼女は、友を失った悲しみとタリバンの殺害予告の恐怖を強さと勇気に変え、実に、堂々としていた。多くの人に支えられた長い病院生活の中で、自分が生かされた意味を問い、人権を蹂躙されている弱者達の代表者として立ち上がることを決意したのであろう。彼女は、自分を襲撃した兵士達をも許し、「心穏やかに、そして全ての人々を愛せよ。」と唱えた。さらに、貧困、無学、不正、人権差別等、中でも基本的人権の侵害が男女共に最重要課題であり、最も憂うべきとして、女性の権利と少女の教育に焦点をあてた。女性自らが声を上げて立ち上がり、「平和と教育」という目標のため、知識を武器に団結して自らを守ろうと。そして、全ての政府に無償の義務教育を確約するように求めた。

イスラム教徒が欧米式教育をそのまま受け入れることには抵抗があろう。日本がかつて欧米式教育と日本の文化と価値観を融合させた独自の教育方式を採用し、戦後の復興と現在の繁栄を築いたように、民主主義に基づいた独自教育を展開することはできないのか。

生物学的な違いはあっても、人権上の男女の差異はない。現代社会では、肉体的・体力的なハンデさえも技術の進歩により埋まりつつある。人種・宗教・出自・性差ではなく、機会は均等に与えられ、各自の能力で評価される世界であるべきだと私は思う。

7月12日は「マララ・デー」、自分の権利を求めて声を上げた全ての女性や少年少女のための日だ。この日を、さらに、世界中のどこかで、誰かの基本的人権が脅かされてはいないかを、世界中の人々が監視し、自分達に何ができるのかを各々が考える日となって欲しいと切に願う。

最優秀賞　2014年　高校の部

課題図書

「誰も私の行動を止められない」

滝中学校・滝高等学校 高校1年　**伊藤　正子**

2013年7月12日、マララさんが国連本部で演説した。この日は、マララさんの16回目の誕生日だった。7月12日は、彼女の誕生日にちなんでマララデーとなった。私は、マララさんの活動を知って虜になった。マララさんは、銃撃にも屈しない強い意志を持っている。

私は、怠け者だ。先生に言われた通りに勉強したことも、両親の望む通り机に向かったこともない。私は、平仮名がいくつか集まって意味を成すことに気付いた日を明確に記憶している。それは、革命だった。看板や広告など町中に溢れる文字が、私を楽しませた。モノクロの世界がカラーに変わったようだった。このことから、学ぶことの大切さは知っている。だから、本を読んだり、メディアで偏りのない知識を得るようにはしている。

6年生の夏休みが近づいたある日、祖母が「野菜くずを埋めると、土が肥える。」と教えてくれた。数週間して祖母が野菜くずを埋めた場所を掘ってみると、跡形もなくなっていた。不思議に思った私は「野菜くずは、なぜ土になるのか」を調べることにした。いくつかの実験と考察を繰り返していたある日、私はあることに気付いた。学校で教わったこと、本やメディアで得た知識、家族や友人との会話で得たもの、旅行、遊びなどあらゆる知識や経験は全て、私の思考の元になっているという事実だ。

私は「学び」を次のようなものとして捉えている。文字が読めることで、飛躍的に知識が増える。表記ができることで、自分の思考をまとめ、論理的にすることができる。豊富な知識と体験は、物事をいろいろな角度から見たり、考えたりする材料となる。つまり、「学び」は物事を単に表面から捉えるだけではなく、物事の奥に潜んでいたり、裏に隠れていたりするものを想像することにつながる。それは、他に対する優しさや思いやりに形を変える。

昨年の夏休み、マララさんのスピーチ原稿をインターネットで見つけた。英文だった。私は、体育の次に英語が苦手だ。英単語もあまり覚えていなかった。でも、どうしても読みたかった。おそらく、私と同じように「学び」を捉えている1歳上の少女の主張を。辞書を片手に、一所懸命に読んだ。原文を読んで良かった。それはマララさんそのものだった。私と似た考えを持つ人に触れることができ、嬉しくて手が震えた。「本とペンを持って闘いましょう。それこそが最も強力な武器なのです。ひとりの子ども、ひとりの教師、一冊の本、そして一本のペンが、世界を変えるのです。教育こそ、唯一の解決策です。まず、教育を。」

そして、この夏、この本に出会った。私は、マララさんの生い立ちや活動家になった経緯を知らなかった。この本を読んで、マララさんがどうして女子教育に対して強く主張しているのが分かった。日本も、先の大戦以前は、程度の差こそあれ女子教育に熱心ではなかったと聞いている。そして、現在の日本は、性差別よりも貧富の差で教育の機会が均等ではなくなっている。教育の機会が均等でないのは、基本的人権に反すると言っても過言ではない。日本も、教育の機会均等を守るよう、努力していかなければならない。

私はマララさんのように国連で演説ができるわけではない。マララさんほどしっかりした動機や強固な意志を持っているわけでもない。だが、私は、教育こそが、人々を貧困から救うと考えている。互いの立場を知り、思いやり、認め合うのも、教育の充実によってしか成しえないと信じている。マララさんの訴えは、私に力をくれた。私は、ペンの力で、自分の考えを知ってもらおうと思う。マララさんのように志を持って生きていこう。今できる学びをして、国際社会に貢献できる大人になれる努力をしていきたい。

優秀賞　2014年　高校の部

課題図書

「私の願い」

お茶の水女子大学附属高等学校1年　**渡邊　清子**

『わたしは女の子だから』この可愛らしい題名と本の中の少女たちの実際に置かれている環境や生活とのギャップに私は、大きなショックを受けてしまった。何度もページをめくる事が出来ず、本を閉じてしまった程だ。

同じ時代に生きている、同じ地球で生活している同年代の女の子達の心の叫びが、私の胸の奥に突き刺ってきた。何とかしたいと思った。

しかし、日本で幸せに学校に通いながら学び、好きな事に囲まれて生活している今の私に何か出来る事はあるだろうか。

「女の子だから」という理由だけで差別を受ける事が当然とされる環境。私には全く想像が出来ない。歴史や伝統、独特な文化の違いは勿論、習慣の違い、社会問題、宗教や思想も違うからだ。

辛く悲しい気持ちを抱えながら何か出来る事はないかと考えて私はこの本をしっかりと読み、自分のものにしていこうという決心をした。

本の中で、心が救われた文章もあった。それは、『はじめに』の最後の言葉。ラキ17歳の苦悩の中にもとても前向きな叫び。

『彼女の夢』の中のベンドゥー「だれかが都合よく解釈した伝統をかんたんに受け入れてはいけない。」という強い思い。

『チェンジ』の作者に対して、ブラン・ウガンダ国統括事務所長サブハドク・ベルベースさんの返答。特に「根本的な変化をもたらすには長い時間がかかるけれど、男女平等実現のための研修計画がなんらかの変化をもたらすはずだと私は確信している。」と言い切って下さった部分。

『送金』の中でレナータがエレナへ送ったメール。「最愛のエレナ」涙が自然に溢れて止まらなかった。

私にとって初めて、本を読み進めるという事がこんなにも苦しい作業なのかと思っていたが、これらの文章に「出会い」現実を知って、この本を通して貴重な体験が出来た事に感謝した。

私の学んでいる高校は今年から5年間、文部科学省よりSGH（スーパーグローバルハイスクール）の指定校になった。グローバルな社会課題を発見・解決できる人材や、グローバルなビジネスで活躍できる人材（国際機関職員、社会起業家、グローバル企業の経営者、政治家、研究者等）グローバルリーダーを高等学校段階から育成する事が目的だ。

来年、2年生になると選択で「グローバル総合」の授業を受ける事ができる。私はグローバル総合を学んで、その中のカリキュラム「国際協力とジェンダー」（人権・格差）や「国際関係と課題解決」（貧困・平和・人権）を特に研究したいと強く思うようになった。

また私はアフガンボランティア部に所属している。今まで以上に募金活動等も積極的に行い、卒業までに心を込めて活動を続けて行きたい。

女の子達の生まれ育った環境は選べないかもしれない。でも、自分の居場所すなわち自分らしい生き方は獲得して欲しい。私は学び研究しながら将来、女性や子どもの権利を守る活動をライフワークにできたらいいなと考え始めるようになった。

この本を読んで、人間らしく平等に生きる権利の重要性と、自分の人生のテーマを掴めた気がしている。本の中で私は、多くの女の子と出会い、その子達の実情を少しだけ知ることが出来た。今はこの本を読んで良かったと心から思っている。

そして、私も知、徳、体のバランスのとれた生きる力を磨けるよう努力したい。女の子達にも生きる力、生きぬく力を育んで欲しいと願っています。

特別賞　2014年　高校の部

課題図書

「『私はマララ』を読んで」

熊本県立宇土高等学校2年　**上野　結羅**

「来世は男に生まれて野球部に入るの。」これは私がよく口にしていた言葉の一つでした。特に野球が好きだったわけではありません。ただ、いつも学校を引っ張っていく野球部が羨ましく、男だからこそできるとのだと思っていたからです。私は、この本を読んで、そんな思いを抱いていた自分が恥ずかしくなりました。

この本の主人公はマララ・ユスフザイさんです。彼女は私と同い年ですが、私とは比べものにならないくらい勇敢で、そしてなにより、女性であることを誇りに思っている方だと感じました。彼女は、女子の教育が軽視されていたパキスタンで、11歳の時から活動をし、女性の教育の権利を認めないタリバンの圧力にも屈せず、「女の子に教育を」と訴え続けてきました。

私はこの本を読んで、マララさんのように女性が自分に誇りを持ち、女性の権利を訴えるべきなのだと強く思いました。私は、ある程度男女が平等になりつつある日本で生まれ育ちましたが、それでも女子であることの不平等さを感じて生きてきました。しかし、女性は男性よりも下なのだと自分で認め、男性が女性を引っ張っていくものだと思っていました。学校で、「学級委員長は男がいい」と言われても反抗することはありませんでした。でも、この本を読んで気づきました。女性も男性と平等な権利を持つべきであり、そして男女平等な世界を造るには、女性が立ち上がるべきだということを。この本の中でマララさんが述べているように、神様は人々を男も女も平等に創ってくださったはずです。しかし今の世の中は男性が優位に立ち、沢山の女の子や女性が男女差別で苦しんでいます。男性に世の中を任せていても男女が平等になる日はやってきません。だから、マララさんのように、私たち女性が女であることを誇りに思い、立ち上がるべきです。

私がこの本の中で最も心打たれた文があります。それは、マララさんが、自分がタリバンに撃たれる場面を想像して言った次の言葉です。

「私は撃たれてもかまいません。でもその前に話をきいてください。あなたたちのやっていることは間違っています。わたしはあなたたちに反抗しようとしているのではなく、ただ、すべての女の子が学校に行けるようになってほしいだけなんです。」

私がもしこの場面に遭遇したら真っ先に逃げると思います。でも今の私たち女性に欠けているのは、マララさんのような勇敢さと、何としてでも女性の権利を訴えようとする不屈の精神なのです。もちろん命も大切ですが、このような力がないと女性は立ち上がれません。

私の夢は、子どもの識字率と女の子の就学率を向上させる活動に携える仕事をすることです。私はこの本を通して、自分の願いを、マララさんのように自ら訴えていきます。そして、誰かに任せるのではなく自分の力で、男女が平等な世界を創っていこうと思います。日本では昔から、「女は男の一歩後ろを歩きなさい」と言われますが、私はこれからは、「男の一歩先を行く女性」でありたいです。

参加中学校・高校一覧（2014年-2016年）

北海道　帯広市立帯広第七中学校
札幌聖心女子学院中学校・高等学校
北海道上ノ国高等学校
北海道室蘭清水丘高等学校

青　森　青森県立青森高等学校
青森県立弘前中央高等学校

岩　手　宮古市立第一中学校
盛岡市立城東中学校

宮　城　仙台市立仙台青陵中等教育学校
仙台市立高森中学校
宮城学院中学校高等学校

福　島　福島市立清水中学校

茨　城　茨城県立水戸第二高等学校
智学館中等教育学校

栃　木　宇都宮市立上河内中学校
上三川町立本郷中学校
栃木県立宇都宮北高等学校

群　馬　伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校
大泉町立西中学校
群馬県立伊勢崎興陽高等学校
館林市立第一中学校

埼　玉　埼玉県立春日部女子高等学校

千　葉　市川中学校・高等学校

東　京　大妻中野中学校・高等学校
お茶の水女子大学付属高等学校
学習院女子中・高等科
吉祥寺女子中学・高等学校
共立女子第二中学校高等学校
晃華学園中学校高等学校
品川女子学院中等部・高等部
昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校
女子学院中学校・高等学校
玉川聖学院中等部・高等部
東京学芸大学附属小金井中学校
東京学芸大学附属国際中等教育学校
豊島岡女子学園中学校・高等学校
日本女子体育大学附属二階堂高等学校
富士見中学高等学校
文京区立第九中学校
町田市立町田第一中学校

神奈川　公文国際学園中等部・高等部
相模女子大学中学部・高等部
洗足学園中学高等学校
横浜女学院中学校高等学校

富　山　富山県立高岡高等学校
富山国際大学付属高等学校

山　梨　甲斐清和高等学校

岐　阜　高山市立日枝中学校
瑞穂市立穂積北中学校

静　岡　静岡大学教育学部附属島田中学校
静岡雙葉高等学校・中学校
不二聖心女子学院中学校・高等学校

愛　知　愛知教育大学附属岡崎中学校
愛知県立時習館高等学校
一宮市立丹陽中学校
名古屋市立楠中学校
名古屋市立鳴海中学校
名城大学附属高等学校
弥富市立弥富北中学校

京　都　京都学園中学高等学校
京都市立深草中学校

大　阪　大阪成蹊女子高等学校
大阪府立住吉高等学校
関西大倉中学校
関西創価中学校・高等学校
天王寺学館高等学校

兵　庫　関西学院中学部・高等部
小林聖心女子学院中学校

岡　山　岡山市立旭東中学校
清心中学校・清心女子高等学校

広　島　ノートルダム清心中・高等学校
広島女学院中学高等学校

香　川　高松市立屋島中学校

福　岡　西南女学院中学校・高等学校

長　崎　聖和女子学院中学校
長崎県立壱岐高等学校

大　分　大分中学校・大分高等学校

鹿児島　鹿児島県立川内高等学校

沖　縄　沖縄県立北谷高等学校

他約80校の中高生が個人応募で参加

学校賞の先生からの声

大妻中野中学校・高等学校（東京都）

「学校ぐるみでグローバル化に取り組む中でプランの読書感想文コンクールとめぐりあいました。生徒たちの目がより広い世界へと向いてくれれば、という半ば挑戦的な試みでした。校内の反応は想像以上に大きく、海外留学に応募する生徒や国際関係の進路を希望する生徒が明らかに増加しています。コンクールで出会った1冊をきっかけに、生徒たちの目が、心が、勢いよく世界へ向かったこと。これは大きな喜びです。」

関西大倉中学校（大阪府）

「貧困・暴力・望まない結婚など、同年代の少女たちが女性という理由でさまざまな権利を剥奪されている状況に、生徒たちは衝撃を受けたようです。しかし、一方で、逆境の中をたくましく生き抜く少女たちの姿に、勇気づけられもしました。大切に育てられたことを家族に感謝する生徒、勉強できる喜びを噛みしめる生徒、将来の夢を自由に思い描けるすばらしさに気づいた生徒。多くの生徒にとって、このコンクールは自分を顧みる良い機会となりました。今後、生徒たちが国際社会に対する関心を高め、広い視野で多角的に考察できる人間に成長することを願っております。」

弥富市立弥富北中学校（愛知県）

「私たちのあたりまえが世界のあたりまえでないことを実感した生徒が多くいました。また、マララさんの自ら世界のために立ち上がる強さに感銘を受け、自分も世界のために役立てることはないかと考え、フェアトレードやボランティアについて調べた生徒もいます。学年で持続可能な国際協力をしようと、学級委員が呼びかけて、プランの募金活動や古本・古ＣＤなどを集めるボランティア活動を進めています。生徒が地球市民として、自分の未来や地球の未来に夢をもち、たくましく生きていってくれることを願っています。」

プランと学校との連携

2016年度は73校の学校、PTA、団体計9,600人以上に
途上国問題などをテーマに授業を行いました。
教材など資料の提供も行っています。

講師派遣の様子

講師派遣の申し込み　教材のダウンロードは

以下ウェブサイト「教育関係者の方へ」をご参考ください。

https://www.plan-international.jp/school/

読書感想文コンクールについては

「教育関係者の方へ/学校でプランの活動に参加する」で紹介しています。

オリジナル教材